

大学生における関係的自己の可変性と精神的健康 および自我同一性との関連

洪川 瑠衣

(2012年10月2日受理)

Variability in the Relational Self, Mental Health and Ego Identity:
University Students

Rui Shibukawa

Abstract: The purpose of this paper was to investigate the relationship among the variability in the relational-self, identity, and mental health in university students. The variability in the relational-self consists of three aspects (Sakuma & Muto, 2003): The motives toward the self-concept depending on social relations, the sense of incongruity for variability in that aspect of self-concept, and the degree of their perceived variability. 315 participants completed questionnaires about the variability in the relational-self, the multidimensional ego identity scale (MEIS) and aspects of mental health. The main results were as follows. (1) The participants were divided into three groups in accordance with their scores. (2) Both men and women in the conflicting variability group had an adverse mental health and lower identity scores than others. (3) Men in the low variability group and women in the unintentional variability group had a good mental health and high identity score. (4) Women in the high variability group had negative emotion and high identity score. These results suggest that it is necessary to consider support for each group.

Key words: relational self, variability, mental health, ego identity

キーワード：関係的自己、可変性、精神的健康、自我同一性

問題と目的

人は状況や関係性に応じて意識的、無意識的に自己を変化させ、それにに応じて多様な自己を認知している(吉田・高井, 2008)。例えば、家族と一緒にいる時の自分と、友人や恋人と一緒にいる時の自分について想起した際、そこに現れる自分は普段と変わらない自分であろうか。それとも異なる自分であろうか。このよ

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：石田 弓（主任指導教員）、前田健一、
兒玉憲一、岡本祐子

うな対人関係に応じた自己概念の可変性と精神的健康との関連について、これまで立場の異なる2つの知見が提出されている。一つは、自己の可変性を複数の社会的役割に対応できる柔軟で適応的なものとして捉える立場であり、抑うつ性の低さやストレス耐性の高さなどと関連することが示されている(榎本, 1998; Linville, 1987)。もう一つは、自己の可変性を自己の不安定さや内的な一貫性の無さといった不適応的なものとして捉える立場であり、自尊感情の低さや抑うつ、情緒不安定性の高さと関連することが示されている(Altrocchi & McReynolds, 1997; Donahue, Robins, Roberts, & John, 1993)。

佐久間(2000)は、先行研究における知見の矛盾が、

従来の研究が変化の程度のみに着目し、変化の主体である個人の視点を考慮していなかったことに起因していると指摘している。そして、実際の生活における様々な人々との関わりの中で経験される自己を関係的自己 (relational self) と定義し、青年期における関係的自己の可変性の自覚について検討した (佐久間, 2006; 佐久間・無藤, 2003)。関係的自己の可変性は、対人関係に応じてどの程度自己が変化すると考えているのか (変化程度)、なぜ変化するのか (変化動機)、変化に対して肯定、否定どちらの評価的意識を持っているのか (変化意識) という3指標 (以下、自己の可変性3指標と略記) から捉えられている。変化動機は、相手に対する配慮や関係維持の動機を表す「関係維持」動機、明確な意図ではなく無意図的、自動的变化を表す「自然・無意識」動機、相手に対して好意的な印象を与えるために変化するという印象操作的動機を表す「演技隠蔽」動機、立場や親密さといった社会文脈的動機を表す「関係の質」動機の4下位尺度から構成されている。佐久間・無藤 (2003) は、自尊感情との関連を検討したところ、従来の自己の可変性研究において扱われてきた変化程度ではなく、演技隠蔽動機や否定的意識といった変化に対する動機や意識が自尊感情に負の影響を与えることを明らかにした。また、このような関連には性差があり、女性の方が男性に比べて不適応傾向を示しやすく、関係維持動機、自然・無意識動機、関係の質動機の得点が高いことが示された。

しかしながら、佐久間の研究 (佐久間, 2006; 佐久間・無藤, 2003) にもいくつか課題が存在する。一つは使用項目についてである。佐久間・無藤 (2003) は、自己の可変性に対する評価的側面を測定するために変化意識尺度 (項目例:「自然」) を作成している。しかし、その尺度項目は、変化動機を測定する変化動機尺度 (項目例:「相手との関係の中で自然にそうになってしまうから」) と内容が重複している。そのため、松下・渋川 (2008) は順序効果などの影響を考慮し、自己の可変性に対する評価的側面の測定のために、変化に対する違和感の程度を測定する変化違和感を使用している。学生相談などの臨床場面では、「自然にふるまえない」や「自分が演じている」といった対人関係における明確な不全感だけでなく、「何となく嫌」といった漠然とした違和感が、大学生の主体的な自己形成の契機になりうるという指摘 (高橋, 2010) もある。そのため、本研究では可変性に対する評価的側面を測定する項目として、変化違和感を用いる。また、これまで、佐久間の研究 (佐久間, 2006; 佐久間・無藤, 2003) を含め、関係的自己の可変性研究では、自己の可変性3指標をそれぞれ単独の指標として用いて分析

が行われている。しかし、これらの指標はいずれも個人の内的過程の一側面を表すものとして考えられており、その性質を考えると3指標の関連性を考慮した検討が必要であると考えられる。佐久間 (2006) では、自己の可変性を否定的に捉え、かつ意識的に自己を変化させている女性はより不適応的な状態へ陥る可能性を指摘し、動機と評価的意識双方の関連性を加味した考察を行っている。しかし、実際の検討は行われておらず、あくまで理論的考察に留まっている。3指標を組み合わせ、各指標の相対的な優劣度の観点から検討することで、単独で扱った際とは異なる特徴が見出される可能性がある。また、この観点から大学生を分類することで、どの群がより適応的であり、どの群がより不適応的であるかを明らかにすることができる可能性が考えられる。そこで、本研究では自己の可変性3指標の組み合わせから大学生を分類し、精神的健康を含めた各群の適応度を比較検討する。

ところで、青年期は自我同一性確立のための模索の時期とされるように、対人関係を通して多様に分化・形成された自己像を主体的な自己として再構成する時期とされている。日本を含めた東洋文化では相互協調的自己観が優位であり、他者との関係性の中で自己を捉える傾向が強いことが指摘されている (Markus & Kitayama, 1991)。そのため、自己が状況依存的に、多面的に形成されやすく、自我同一性の確立にも困難が伴う (高田, 2004)。特に女性は、自律性や個性性を重視する男性と比べて、共感的で親密な関係を維持することを重視するという性役割観 (岡本, 1999) から、他者との関係の中で自己を捉える傾向が強いことが多くの研究で指摘されている (山本, 1989)。

自我同一性とは、Erikson (1950 仁科訳 1977) によって提唱された概念であり、自己の単一性・連続性・斉一性・独自性の感覚を表す (小此木, 2002)。自我同一性は、他者との関係性の中で形成・発達していく感覚であり、精神病理を含めた様々な問題と関連するとされる (谷, 2008)。また、自我同一性の達成の程度によって自己開示の程度やその対象が異なる (榎本, 1991) など、対人行動に関しても影響を与えることが指摘されている。そのため、大学生の心理社会的適応を考える上で重要な概念であると考えられる。谷 (2001) は青年期における自我同一性を測定するために、多次元的自我同一性尺度 (Multidimensional Ego Identity Scale: 以下、MEIS と略記) を作成した。MEIS は、自己の普遍性および時間的連続性を表し、過去と現在の自己一致の感覚を示す「自己の斉一性・連続性」、他者から見られている自己と本来の自己が一致している感覚を示す「対他的同一性」、自らの目

指すべきもの、将来展望などが明確に意識されているという自己意識の明確さの感覚を示す「対自的同一性」、現実社会の中における自己の意味づけを表し、自己と社会との適応的な結びつきの感覚を示す「心理社会的同一性」の4因子から構成されている。また、谷(2008)によると、MEISで測定される自我同一性は、共分散構造分析の結果から、自己の斉一性・連続性と対他的同一性から成る「中核的同一性」と、対自的同一性と心理社会的同一性から成る「心理社会的同一性」という2つの上位概念からなる多次元的構造が仮定されている。中核的同一性はその形成過程から自我同一性の中でもより中核的な側面を示すとされ、重篤な精神病理傾向との関連が示唆されている。一方、心理社会的同一性は青年期における心理社会的危機によって形成される同一性感覚とされ、より表層的、現実的な側面を示すことが指摘されている。さらに、中核的同一性と心理社会的同一性のどちらを扱うかで、対象となる他者の次元が異なる可能性も示唆されている(畑野, 2010)。また、自己の斉一性・連続性の拡散は、基本的信頼感や時間的展望の拡散との関連が指摘されている(谷, 1998)。

以上より、本研究では、自己の変異性3指標の組み合わせから大学生を分類し、精神的健康および自我同一性の観点から各群の特徴を明らかにする。なお、精神的健康との関連については、佐久間・無藤(2003)が自尊感情を用いて検討を行い、自尊感情の低さとの関連と性差の存在を明らかにしている。しかし、抑うつや不安といった他の変異性研究で使用されることの多い変数を用いた場合にも同様の結果が示されるかはまだ確認されていない。青年期は認知機能の発達に伴い抑うつや不安を生じやすい時期とされている(高田, 2004)。また、自己の変異性を自己概念の不安定さや不一致と捉えた場合、自己への不信感や絶望などネガティブな感情が生じ、精神的健康を悪化させる可能性も指摘されている(田島, 2010)。抑うつなど否定的な感情も含め、複数の指標を用いて精神的健康との関連を検討することで、関係的自己の変異性の適応性、不適応性がより明確に示される可能性がある。そのため、本研究では精神的健康を測定する指標として、幸福感、自尊感情、抑うつ、不安、ポジティブ感情、ネガティブ感情を使用する。

方 法

調査対象者と手続き

大学生315名(男性175名, 女性140名)を対象に集団法による質問紙調査を実施した。ただし、自尊感情

尺度を除く精神的健康尺度と自我同一性尺度に関しては、調査対象者のうち200名(男性132名, 女性68名)のみに行った。調査対象者の平均年齢は20.5歳($SD=1.12$)であった。また、男女別の平均年齢は男性が20.5歳($SD=1.21$), 女性が20.6歳($SD=1.00$)であった。

質問紙の構成

関係的自己の変異性に関する指標 佐久間(2006; 佐久間・無藤, 2003)の作成した変化動機尺度を使用した。教示については、回答の効果を上げることを目的に、下記のように一部改変した松下・渋川(2008)を使用した。教示は、回答前に自分を取り巻く対人関係を自由に想起させ、実際に記述させた後、質問に回答するという方法であった。(a) 変化程度: 「人間関係に応じて自分がどの程度変わると感じますか」という1項目を使用した。「1. 全く変わらない」から「6. 非常に変わる」までの6件法で評定を求めた。(b) 変化違和感: 「相手によって自分が変わることをどのように感じますか」という1項目を使用した。「1. 全く違和感がない」から「6. 非常に違和感がある」までの6件法で評定を求めた。(c) 変化動機: 変化動機尺度を使用した(26項目)。「関係維持(「相手との関係を壊したくないから」など8項目)」、「自然・無意識(「相手との関係の中で自然にそうになってしまうから」など5項目)」、「演技隠蔽(「相手によって自分をどう見せたいかが違うから」など7項目)」、「関係の質(「相手との関係の中での立場が違うから」など6項目)」の4下位尺度から成る。「1. 当てはまらない」から「5. 当てはまる」の5件法で評定を求めた。

精神的健康に関する指標 (a) 幸福感尺度: 遠藤(1997)が作成した相対的幸福感尺度を使用した(「たいていの世の中の人に比べて、どの程度幸福ですか」1項目)。「1. はるかに不幸」から「7. はるかに幸福」の7件法で評定を求めた。(b) 自尊感情尺度: Rosenberg(1965)の自尊感情尺度邦訳版(山本・松井・山成, 1982)を使用した(「自分にはたくさんの長所があると思う」など10項目, 1因子)。「1. 当てはまらない」から「5. 当てはまる」の5件法で評定を求めた。(c) 抑うつ・不安尺度: 尾関(1993)が作成した改訂版大学生用ストレス反応尺度の下位尺度のうち、「抑うつ(「悲しい気持ちだ」など5項目)」と「不安(「不安を感じる」など5項目)」を使用した。「1. 当てはまらない」から「4. 当てはまる」の4件法で評定を求めた。(d) ポジティブ感情・ネガティブ感情尺度: Watson, Clark, & Tellegen(1988)の日本語版ポジティブ感情・ネガティブ感情尺度(佐藤・安田, 2001)を使用した(16項目)。「ポジティブ感情(「活

気のある」など8項目)」と「ネガティブ感情（「びくびくした」など8項目）」の2下位尺度から成る。「1.全く当てはまらない」から「6.非常によく当てはまる」の6件法で評定を求めた。

自我同一性に関する指標 谷 (2001) が作成した MEIS を使用した (20項目)。「自己の斉一性・連続性 (「過去において自分自身を置き去りにしてきたような気がする」逆転項目)」、「対自的同一性 (「自分がどうなりたいたいかははっきりしている」)」、「対他的同一性 (「自分は周囲の人によく理解されていると感じる」)」、「心理社会的同一性 (「現実社会の中で、自分らしい生き方ができると思う」)」の4下位尺度 (各下位尺度5項目) から成る。「1.全く当てはまらない」から「7.非常に当てはまる」の7件法で評定を求めた。

結果

各尺度の検討

複数項目から構成されている変化動機尺度、自尊感情尺度、抑うつ尺度、不安尺度、ポジティブ感情尺度、ネガティブ感情尺度、MEISの内的整合性を検討するために、各尺度に対してCronbachの α 係数を算出した。その結果、変化動機尺度は、関係維持.86、自然・無意識.91、演技隠蔽.80、関係の質.71であり、ほぼ十分な値を示した。また、自尊感情.85、抑うつ.88、不安.85、ポジティブ感情.87、ネガティブ感情.88と十分な値を示した。MEISに関しても自己の斉一性・連続性.88、対自的同一性.86、対他的同一性.83、心理社会的同一性.85と十分な値を示した。そこで、本研究では各尺度とも先行研究と同様の尺度構成のまま使用し、下位尺度項目合計値を下位尺度得点として用いた。なお、佐久間 (2006) および佐久間・無藤 (2003) では、自尊感情尺度の項目8 (「もっと自分を尊敬できるようにになりたい」) を因子負荷量の低さから除外し、9項目として分析を行っていた。本研究においても因子負荷量の確認を行ったところ、項目8の値が.08と極端に低かったことから、項目8を除いた9項目を採用し、9項目の合計得点を自尊感情得点とした。さらに、MEISの4下位尺度の合計得点をMEIS合計として算出し、分析に用いた。

関係的自己の可変性の性差

自己の可変性3指標得点の性差を検討するために t 検定を行った。各指標の男女別平均値と t 検定結果を Table 1 に示した。分析の結果、自然・無意識動機と演技隠蔽動機において有意差が認められ、いずれも女性の得点が男性に比べて高かった。また、変化程度において有意傾向が認められ、女性の方が男性に比べて

Table 1 男女別の平均値 (SD) と t 検定結果

	男性	女性	t 値
1. 変化程度	4.38 (1.11)	4.59 (0.89)	-1.81 †
2. 変化違和感	2.91 (1.12)	3.08 (1.05)	-1.34
3. 関係維持	3.35 (0.81)	3.47 (0.81)	-1.34
4. 自然・無意識	3.53 (0.90)	4.00 (0.79)	-4.99 **
5. 演技隠蔽	3.21 (0.71)	3.37 (0.75)	-2.02 *
6. 関係の質	4.08 (0.68)	4.18 (0.56)	-1.43

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

得点が高い傾向にあることが示された。自己の可変性3指標の半数の得点に性差が認められたため、以下の分析はすべて男女別に行うこととした。

自己の可変性3指標の相関分析

自己の可変性3指標間の関連を検討するために、男女別に相関分析を行った (Table 2)。その結果、変化程度と変化動機の関連については、男女ともに全て有意な正の相関が示された。また、変化違和感との関連については、女性では演技隠蔽動機と有意な正の相関が認められたのに対し、男性では関係維持動機と有意な正の相関、自然・無意識動機と有意な負の相関が認められたが、いずれも非常に弱い値であった。

Table 2 男女別の相関分析結果

	1. 変化程度		2. 変化違和感	
	男性	女性	男性	女性
1. 変化程度	—	—	—	—
2. 変化違和感	-.14	.10	—	—
3. 関係維持	.18 *	.28 **	.18 *	.10
4. 自然・無意識	.26 **	.32 **	-.16 *	.00
5. 演技隠蔽	.37 **	.30 **	.14	.21 *
6. 関係の質	.23 **	.23 **	-.03	-.05

* $p < .05$, ** $p < .01$

自己の可変性3指標と精神的健康および自我同一性の相関分析

自己の可変性3指標と精神的健康および自我同一性の相関分析を行った (Table 3)。その結果、精神的健康との関連については、男性では変化違和感を除く全ての指標がポジティブな精神的健康指標とは負の相関を、ネガティブな精神的健康指標とは正の相関を示し、自己の可変性に対する程度や動機の自覚が高いほど精神的健康度が低くなることが示された。一方、女性では自然・無意識動機以外の指標において男性と同様の相関パターンを示し、自己の可変性に対する程度や違和感、意図的な動機の自覚が高いほど精神的健康度が低くなることが示された。

自我同一性との関連については、男性では変化程度、

Table 3 男女別の自己の変異性3指標と精神的健康および自我同一性の相関分析結果

	変化程度		変化違和感		関係維持		自然・無意識		演技隠蔽		関係の質	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
精神的健康												
幸福感	-.12	-.11	-.01	-.04	-.12	-.20	.15	-.10	-.10	-.08	-.11	-.34 **
自尊感情	-.28 **	-.31 **	-.05	.07	-.20 **	-.23 **	-.12	-.12	-.19 *	-.18 *	-.08	-.13
抑うつ	.18 *	.20	.05	.11	.27 **	.12	.19 *	.17	.24 **	.28 *	.07	.12
不安	.31 **	.38 **	.00	.16	.27 **	.37 **	.14	.20	.27 **	.31 **	.11	.22
ポジティブ感情	-.22 *	-.25 *	.13	.08	.00	-.24 *	-.08	-.23	-.02	-.24 *	-.07	-.04
ネガティブ感情	.27 **	.09	.16	.35 **	.24 **	.28 *	-.04	-.00	.38 **	.28 *	.17 *	.09
自我同一性												
自己斉一性・連続性	-.16	.06	-.10	-.15	-.11	-.24 *	-.06	-.30 *	-.26 *	-.08	-.08	-.34 **
対自的同一性	-.17 *	-.18	.01	-.05	-.14	-.12	-.02	-.26 *	-.19	-.18 *	-.08	-.13
対他的同一性	-.08	-.21	-.02	.05	-.04	-.25 *	.05	-.36 **	-.33 **	.28 *	-.29 *	.12
心理社会的同一性	-.29 **	-.30 *	.01	.03	-.16	-.39 **	-.03	-.17	-.36 **	.31 **	-.27 *	.22
MEIS合計	-.21 *	-.18	-.04	-.04	-.15	-.34 **	-.03	-.41 **	-.39 **	-.24 *	-.24 *	-.04

* $p < .05$, ** $p < .01$

演技隠蔽動機、関係の質動機で有意な負の相関が示され、自己の変異性に対する程度および印象操作的動機や社会文脈的動機の自覚が高いほど自我同一性確立の程度が低い、つまり自我同一性拡散の傾向にあることが示された。また、女性では変化違和感を除く全ての指標で有意な負の相関がみられ、自己の変異性に対する程度や動機が高いほど自我同一性拡散の傾向にあることが示された。

クラスタ分析による類型化と各クラスタの特徴

自己の変異性3指標の得点を標準化し、クラスタ分析（Ward法、平方ユークリッド距離）を行った。人数のばらつきや解釈可能性からデンドログラムの平方和増分12を基準としたところ、男女ともに3つのクラスタが抽出された（Figure 1, 2）。

男性のクラスタ1（60名）は、全ての指標得点が平均値よりも低い群であり、対人関係に応じて自己を変化させるという動機が低く、変化の自覚も違和感も低い群であった。自己の変異性に対する自覚が低い、つ

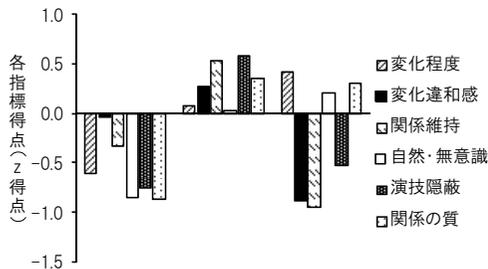


Figure 1. 男性のクラスタ分析結果（左から、変化無自覚群、変化葛藤群、無意識的变化肯定群）

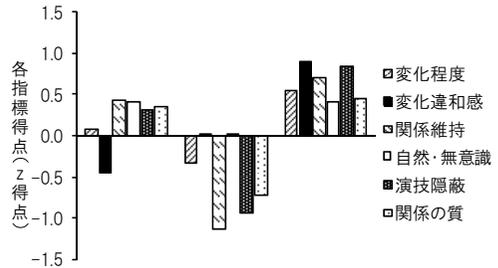


Figure 2. 女性のクラスタ分析結果（左から、変化肯定群、無意識的变化違和感群、変化葛藤群）

まり、対人関係に応じてあまり自己が変化しないと感じている群であると考えられたことから、この群を「変化無自覚群」と命名した。クラスタ2（79名）は、全ての指標得点が平均値よりも高い群であり、3クラスタ中唯一、変化違和感が平均値よりも高かった。自己の変異性に対する自覚も動機も明確であるが、変化する自分に対して違和感を持っているというアンビバレントな態度を示す群であると考えられたことから、この群を「変化葛藤群」と命名した。クラスタ3（36名）は、変化程度、自然・無意識動機、関係の質動機が平均値よりも高く、変化違和感の低さが特徴的な群であった。自然・無意識動機と関係の質動機はともに印象操作のような特定の意図を持たない無意識的、非印象操作的動機による変化であり、そのような変化に対して違和感を感じていない群であると考えられた。そのため、この群を「無意識的变化肯定群」と命名した。

女性のクラスタ1（59名）は、変化程度と変化動機が平均値よりも高く、3クラスタ中唯一、変化違和感

Table 4 男女別のクラスタ3群間における各得点の平均値 (SD) と1要因分散分析結果

	男性						F 値	女性						
	変化無自覚群 n=43		変化葛藤群 n=62		無意図的 変化肯定群 n=27			変化肯定群 n=28		無意図的変化 違和感群 n=19		変化葛藤群 n=21		F 値
精神的健康														
幸福感	4.83	(1.07)	4.72	(.91)	4.88	(1.37)	.27	4.68	(.67)	5.09	(.57)	4.48	(.93)	3.64 *
自尊感情 ^{a)}	30.87	(6.53)	27.85	(7.21)	29.72	(6.80)	3.36 *	27.59	(5.46)	29.18	(5.67)	26.76	(5.96)	1.90
抑うつ	9.21	(4.02)	11.39	(4.24)	9.70	(3.98)	3.96 *	9.86	(3.69)	11.63	(3.35)	12.00	(3.55)	2.58 †
不安	9.21	(3.55)	11.27	(3.96)	10.44	(3.66)	3.81 *	10.82	(3.60)	9.63	(3.10)	12.14	(3.14)	2.86 †
ポジティブ感情	22.84	(9.00)	22.76	(8.94)	22.44	(6.57)	.02	20.00	(5.86)	22.16	(7.46)	21.81	(6.10)	.80
ネガティブ感情	17.53	(6.79)	23.02	(9.15)	20.11	(9.37)	5.34 *	18.68	(6.84)	19.47	(5.96)	25.43	(7.21)	6.71 **
自我同一性														
自己の斉一性・連続性	25.88	(7.80)	21.89	(7.65)	24.15	(7.86)	3.46 *	24.11	(5.10)	24.26	(5.01)	22.48	(6.32)	.70
対自的同一性	23.47	(7.26)	21.32	(5.87)	22.67	(6.08)	1.48	20.79	(3.94)	19.21	(6.11)	18.19	(5.14)	1.68
対他的同一性	20.30	(5.93)	18.89	(5.44)	19.11	(5.21)	.87	19.54	(4.94)	22.11	(5.10)	17.24	(5.12)	4.65 *
心理社会的同一性	24.07	(6.35)	21.94	(5.45)	22.93	(5.83)	1.70	21.00	(4.67)	23.68	(3.65)	19.62	(3.92)	4.86 *
MEIS合計	92.23	(19.79)	83.55	(18.16)	87.67	(16.17)	2.86 †	85.29	(10.74)	87.79	(13.10)	77.81	(13.83)	3.62 *

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

^{a)} 自尊感情の回答者数は、男性145名(変化無自覚群60名, 変化葛藤群79名, 無意図的変化肯定群36名), 女性140名(変化肯定群59名, 無意図的変化違和感群39名, 変化葛藤群42名)

が平均値よりも低い群であった。自己の可変性の自覚も動機も明確で、変化する自分に対しても違和感を持っていないという肯定的態度を示す群であると考えられたため、この群を「変化肯定群」と命名した。クラスタ2(39名)は、変化違和感と自然・無意識動機以外の指標得点が平均値よりも低い群であった。指標得点の分布は男性における変化無自覚群と類似した特徴を持つが、自然・無意識動機と変化違和感の得点が平均値以上であったことから、漠然とではあるが自動的な変化の感覚や違和感を自覚している群であると考えられた。そのため、この群を「無意図的変化違和感群」と命名した。クラスタ3(42名)は、全ての指標得点が平均値よりも高い群であり、男性における変化葛藤群と同様の特徴を示す群であった。そのため、男性のクラスタと同様、「変化葛藤群」と命名した。

各クラスタにおける精神的健康および自我同一性

クラスタ分析で抽出された3クラスタを独立変数、精神的健康と自我同一性に関する指標を従属変数とした1要因分散分析を男女別実施した(Table 4)。その結果、男性では自尊感情、抑うつ、不安、ネガティブ感情で有意な主効果が示された。多重比較(TukeyのHSD法)を行ったところ、自尊感情では変化無自覚群が変化葛藤群に比べて得点が高く、抑うつ、不安、ネガティブ感情では変化葛藤群が変化無自覚群に比べて得点が高かった。また、自己の斉一性・連続性とMEIS合計で有意な主効果が示され、いずれも変化無自覚群が変化葛藤群に比べて得点が高いことが示され

た。一方、女性では幸福感、抑うつ、不安、ネガティブ感情で有意な主効果が示された。多重比較の結果、幸福感では無意図的変化違和感群が変化葛藤群に比べて得点が高く、ネガティブ感情では変化葛藤群が変化肯定群と無意図的変化違和感より得点が高かった。抑うつでは変化葛藤群が変化肯定群に比べて、不安では変化葛藤群が無意図的変化違和感群に比べて得点が高い傾向にあることが示された。また、対他的同一性、心理社会的同一性、MEIS合計においても有意な主効果が認められ、対他的同一性とMEIS合計において無意図的変化違和感群が変化葛藤群に比べて得点が高かった。心理社会的同一性では、無意図的変化違和感群が変化肯定群と変化葛藤群に比べて得点が高いことが示された。

考 察

本研究の目的は、大学生の関係的自己の可変性を類型化し、自己の可変性と精神的健康、自我同一性との関連について検討することであった。

関係的自己の可変性の特徴

自己の可変性3指標について性差を検討したところ、変化程度、自然・無意識動機、演技隠蔽動機において有意差が認められ、いずれも男性に比べて女性の得点が高かった。また、自己の可変性3指標について相関分析を行ったところ、変化程度は男女ともに全ての動機と正の相関を示し、動機が高いほど自己の可変性も自覚しやすいことが示された。変化違和感につい

ては、男性では関係維持動機と正の相関、自然・無意識動機と負の相関が認められ、女性では演技隠蔽動機とのみ正の相関が認められた。以上のことから、男女ともに変化動機が高いほど対人関係に応じた自己の変化を自覚していること、そしてその傾向は男性に比べて女性が強く、特に女性は自己変化の動機として自然・無意識動機や演技隠蔽動機を自覚しやすいことが示された。

佐久間（2006）および佐久間・無藤（2003）の知見と比較すると、自然・無意識動機については同様の結果が得られているが、変化程度と演技隠蔽動機はいずれも性差が示されておらず、異なる結果であった。女性は男性に比べて共感的で親密な関係を維持することを重視し、他者との関係の中で自己を捉える傾向が高いことが指摘されている（山本，1989）。そのため、このような女性における他者志向性や関係性と結びついた自己認知のあり様が、本研究では変化程度や演技隠蔽動機の高さとして示された可能性が考えられる。

また、男性において変化違和感と正の相関が示された関係維持動機は、他者からの評価や相手への配慮に応じた自己変化の動機である。高田（2004）は、関係維持動機が他者との関係性を重視する日本文化においては評価懸念として認識される可能性を指摘している。佐久間・無藤（2003）においても、関係維持動機は自己観尺度の評価懸念と正の相関が示されている。評価懸念の高さや「相手がどうしたいか」といった自分よりも相手の感覚や判断を重視するあり方は、個別性や自律性を重視する男性の性役割観とは一致しないものである。そのため、男性においてのみ、関係維持が変化違和感と関連を示したものと考えられる。一方、女性において変化違和感との関連が示された演技隠蔽動機は、内面的な関係性を求める女子大学生にとってはありのままの自分を表せない不安を表すため、否定的評価として捉えられやすいことが指摘されている（佐久間・無藤，2003）。本研究において、女子大学生の変化違和感と演技隠蔽動機に関連が認められたことは、佐久間・無藤（2003）の結果を支持するものである。しかし、変化違和感と関連する演技隠蔽動機が特に女性において高い得点を示したことは、女子大学生が対人関係と自己の関わりについて難しさを抱えていることを示唆するものであるとも考えられる。

精神的健康および自我同一性との関連

自己の可変性3指標と精神的健康との相関分析から、男女ともに変化程度が高いほど自尊感情やポジティブ感情が低く、不安やネガティブ感情が高くなることが示された。この結果は自己の可変性と不適応との関連を指摘した先行研究（例えば Donahue et al.,

1993）の指摘と一致するものであると考えられ、性別にかかわらず大学生にとって対人関係に応じた自己の可変性の自覚が精神的健康の低さと関連することが改めて示された。また、本研究では男性において自然・無意識動機と抑うつに正の相関が示され、相手に応じて自動的に変化するという動機が高い男性ほど抑うつのようになりやすいことが示された。自然・無意識動機は、自尊感情のみを使用した佐久間・無藤（2003）では有意な影響が認められず、精神的健康との関連は不明なままであった。本研究においても自然・無意識動機は自尊感情と有意な相関を示していない。しかし、男性のみではあるが自然・無意識動機と抑うつとの間に関連が示されたことは、複数の指標を用いて精神的健康を測定した本研究の成果であり、精神的健康を多面的に捉える重要性を示すものであると考えられる。

また、自己の可変性3指標と自我同一性との関連については、男性では変化程度、演技隠蔽動機、関係の質動機で有意な相関が示され、自己の可変性の程度および「嫌いな自分を隠す」や「相手との立場によって変化する」といった動機の自覚が高いほど自我同一性拡散の傾向にあることが示された。一方、女性では変化違和感を除く全ての指標で有意な負の相関が示され、可変性に対する程度や動機が高いほど自我同一性拡散の傾向にあることが示された。

関係的自己の可変性に対する態度傾向とその特徴

3指標を用いたクラスタ分析によって大学生を分類したところ、男性では変化無自覚群、変化葛藤群、無意図的变化肯定群の3群、女性では変化肯定群、無意図的变化違和感群、変化葛藤群の3群が見出された。また、分散分析の結果、各群において自尊感情を含めた複数の指標で有意差が認められた。以下、男女別に各群の特徴について述べる。

男性の態度傾向について 変化無自覚群は、関係的自己の可変性に対する自覚が低く、対人関係に応じてあまり自己が変化しないと感じている群であった。この群は変化葛藤群に比べて自尊感情の高さや、抑うつ、不安、ネガティブ感情の低さが示され、精神的健康度の高さが推察された。対人関係に応じてあまり自己が変化しないと感じている大学生の方が精神的健康度が高いという結果は、自己の可変性3指標それぞれと精神的健康との相関分析の結果と同様である。個別性や自律性を重視する男性にとって、相手に応じて自己が変化することは“主体性のなさ”といった否定的なものとして捉えられる可能性がある（佐久間，2006）。自我同一性との関連についても、自己の斉一性・連続性と MEIS 合計が高いことが示され、自我同一性確立の程度が高いことが推察された。自己の斉一性・連

続性は、過去の自分と現在の自分の一貫性や時間的連続性に関する同一性を表す。自己が時間的一貫性を持って体験されている感覚は、相手や状況に応じて自己が変化しないという変化無自覚群の態度傾向とも一致する。時間的連続性の感覚は基本的信頼感と関連を示すことが指摘されており(谷, 1998), このような基本的信頼感に裏付けられた自己の一貫性の感覚が、精神的健康度の高さとも関連していると考えられる。

変化葛藤群は、自己の可変性に対してアンビバレントな態度を示す群であった。この群は変化無自覚群と比べて自尊感情の低さや抑うつ、不安、ネガティブ感情の高さが示され、精神的健康度の低さがうかがわれた。佐久間(2006)は、自己の可変性を否定的に捉え、かつ意識的に自己を変化させている女性はより不適応的な状態へ陥る可能性について触れている。自己の可変性3指標を統合的に扱った本研究は、佐久間(2006)の理論的考察を実証的に検討したものと考えられるが、分析の結果、佐久間が仮説として挙げていた女性だけでなく、男性においても可変性に対する動機と否定的評価が不適応傾向と関連することが明らかとなった。また、自我同一性に関しては自己の斉一性・連続性と MEIS 合計が低かった。精神的健康度が低い変化葛藤群において精神病理傾向との関連を示す中核的同一性の低さが示されたことは、谷(2008)の指摘を支持するものと考えられ、変化葛藤群の大学生に対する心理的援助の必要性を示唆するものであると考えられる。

無意図的变化肯定群は、無意図的、非印象操作的動機による変化について肯定的態度を示す群であった。自己の可変性3指標それぞれを単独で用いた相関分析では、変化程度、自然・無意識動機、関係の質動機のいずれも精神的健康度の低さや自我同一性拡散との関連が示されていた。そのため、可変性3指標を組み合わせた態度傾向として捉えた場合にも、同様に不適応傾向と関連を示す可能性が考えられた。しかしながら、分析の結果、この群は精神的健康についても、自我同一性についても他の2群と有意な差が認められなかった。非印象操作的動機による自己表出は、円滑な対人関係を支える機能を担っているとの指摘がある(成田・松井, 2009)。変化程度、非印象操作的動機が高く、変化違和感の低い無意図的变化肯定群は、自己の可変性を成田・松井(2009)の指摘のように肯定的なものとして捉えていると考えられる。しかし一方で、その態度傾向は、個別性を重視する男性の性役割観(岡本, 1999)とは異なる可能性が考えられ、このような価値観の相違が、無意図的变化肯定群の結果に影響を与えた可能性も考えられる。また、この群は、無自覚的、

潜在的な変化動機である自然・無意識動機が3群中最も高かった。男性は女性に比べて可変性の自覚や動機が不明確であることが指摘されている(佐久間, 2006)。そのため、自覚的、意識的な態度傾向を測定する質問紙では、その特徴を十分に測定できなかった可能性も考えられ、測定方法の再検討も含め、今後さらに詳細な検討が必要であると考えられる。

女性の態度傾向について 変化肯定群は、女性に特徴的な群であり、自己の可変性に対して肯定的態度を示す群であった。この群は変化葛藤群に比べて抑うつとネガティブ感情が低く、精神的健康度の高さがうかがわれた。他者との協調性を重視する日本文化の中でも、特に女性は、周囲への気配りなどの共感性を好ましい性役割観として捉える傾向にあることが指摘されている(岡本, 1999)。変化肯定群において精神的健康と適応的な関連が示されたことから、この群の女性が社会的に求められている性役割観と合致する好ましい態度として自己の可変性を捉えている可能性が推察された。変化肯定群が女性でのみ見出されたことも、上記に示されるような性別による役割期待の違いを反映したものであると考えられる。しかしながら一方で、自我同一性との関連では、無意図的变化違和感群と比べて心理社会的同一性が低く、現実他者との自己認知の一致の感覚や自己と社会との適応的な結びつきの感覚が低いことが示唆された。心理社会的同一性は、青年期における心理社会的危機において形成される同一性感覚であり、自我同一性の中でも表層的、現実的な側面を表すとされる(谷, 2008)。本研究の変化肯定群において示された、精神的健康に関しては適応的傾向を示しているが心理社会的同一性に関しては拡散の傾向にあるという結果は、この群の女性が基本的な精神的健康度の高さや中核的同一性を維持しているが、比較的表層における社会的側面の同一性に関しては拡散や混乱を抱えている可能性を示唆すると考えられる。変化肯定群における上記のような状態が、自我同一性確立という青年期の発達課題に取り組んでいる状態を表している可能性も考えられるため、今後さらに検討が必要であると考えられる。

無意図的变化違和感群は、漠然とではあるが自動的な変化の感覚や違和感を自覚している群であった。この群は女性3群の中で最も幸福感が高く、不安やネガティブ感情が低かった。自我同一性についても3群の中で最も得点が高く、対他的同一性、心理社会的同一性、MEIS 合計が有意に高かった。漠然とではあるが自己の可変性に対して違和感を感じている群が最も適応度が高いという本研究の結果は、可変性に対する否定的意識と精神的健康度の低さの関連を示した佐久間

の知見(佐久間, 2006; 佐久間・無藤, 2003)とは矛盾する。高橋(2010)は、対人場面で感じる違和感について、自他未分化な状態では違和感自体生じないことを指摘し、違和感の自覚を主体的な自己形成の契機として捉える必要性を指摘している。相互協調的自己観の高い日本文化の中でも特に女性は、協調性を求める性役割観の影響から自他融合の関係性になりやすく、主体的な自己形成に困難が伴うことが指摘されている(高田, 2004)。無意図的变化違和感群における適応度の高さから、女性においては、自己の変異性に対する強すぎる違和感や明確な否定的意識は精神的健康度の低下に繋がるが、漠然とした違和感は主体的な自己の存在やその確立の兆しを示す肯定的側面として捉える必要性が示唆された。

変化葛藤群は、男性における変化葛藤群と同様の特徴を有している群であり、自己の変異性に対してアンビバレントな態度を示す群であった。精神的健康度については、3群の中で最も幸福感が低く、不安とネガティブ感情が高かった。また、自我同一性についても、3群の中で最も対他同一性、心理社会的同一性、MEIS合計が低いことが示され、男性同様女性でも、自己の変異性に対する葛藤的態度は不適応的傾向と関連することが明らかとなった。

心理臨床的援助への応用の試み

自己の変異性に対する態度傾向と精神的健康および自我同一性との関連を検討した結果、変化葛藤群において、男女ともに精神的健康度の低さや、精神病理傾向との関連が示唆される(谷, 2008)中核的同一性の低さが示され、心理的援助の必要性がうかがわれた。しかし、中核的同一性でも、男性では対自的側面を表す自己の斉一性・連続性が低かったのに対し、女性では社会的側面を表す対他同一性の低さが示され、同様の態度傾向を示す群であっても中心となる課題には性差がある可能性が推察された。この結果は、心理的援助の際のアプローチの違いとしても考えることができる。例えば、変化葛藤群の女性に対して援助を行う際には、他者から見られているであろう自分や社会から求められているであろう自分と、自分自身が認知している本来の自分との認識に注目し、その不一致や乖離を解消していくようなアプローチが重要である可能性が考えられる。一方、男性では、女性のように自己像に関する自他の認識の一致ではなく、あくまで自己の時間的連続性に注目し、過去の自分と現在の自分の不一致や乖離を解消するようなアプローチが重要である可能性が推察される。

また、変化肯定群は、自我同一性における社会的側面の中でもより表層的、現実的な他者との関わりを示

す心理社会的同一性が低かった。変化肯定群は、精神的健康度に大きな問題は認められず、また、青年期の課題における模索の段階にある可能性も考えられるため、本人の主体性を重視しながら、現実的な対人関係と自己の問題について、具体的に検討するような心理教育的なアプローチが適当である可能性が推察される。

今後の課題

本研究では、関係的自己の変異性に関する3側面を統合的に捉える試みとして、クラスタ分析によって大学生を分類し、各群の特徴を検討した。その結果、男女ともに、変異性に対する態度傾向の異なる3つの群が見出され、群によって精神的健康度や自我同一性の確立の程度に差異が認められた。しかしながら、本研究では無意図的变化肯定群と他の群間には有意差が認められず、その特徴は十分に2検討されなかった。今後は、より無自覚的、潜在的な態度傾向を捉える投影法などの方法を用いて各群の特徴を更に検討する必要があると考えられた。

【引用文献】

- Altrocchi, J. M., & McReynolds, P. (1997). The self-pluralism in self-structure. In J. Rowan & M. Cooper (Eds.), *The plural self: Multiplicity in every life*. Sage. pp.168-182.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 834-846.
- 遠藤由美 (1997). 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究, *68*, 387-395.
- 榎本博明 (1991). 自己開示と自我同一性地位の関係について 中京大学教養論叢, *31*, 207-229.
- 榎本博明 (1998). 「自己」の心理学—自分探しへの誘い— サイエンス社
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton
- (エリクソン, E.H. 仁科弥生(訳編)(1977). 幼児期と社会 I みすず書房)
- 畑野 快 (2010). 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティの関連性 教育心理学研究, *58*, 404-413.
- Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression.

- Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 663-676.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 松下姫歌・渋川瑠衣 (2008). 大学生における関係的自己の可変性に関する研究—Connected-Self および Separated-Self の観点から— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), **57**, 151-158.
- 成田恭代・松井 豊 (2009). 自己呈示に伴う否定的意識の規定因の探索的検討 対人社会心理学研究, **9**, 33-44.
- 岡本直子 (1999). 親密な他者の存在と成功恐怖の関係について 教育心理学研究, **47**, 19-208.
- 小小木啓吾 (2002). 現代の精神分析—フロイトからフロイト以後へ— 講談社
- 尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改定—トランスアクションな分析に向けて— 久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-114.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 佐久間路子 (2000). 多面的自己—関係性に注目して— お茶の水女子大学人文科学紀要, **53**, 435-451.
- 佐久間路子 (2006). 幼児期から青年期にかけての関係的自己の発達 風間書房
- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, **51**, 33-42.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.
- 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学 自己・社会的比較・文化 ナカニシヤ出版
- 谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, **9**, 35-44.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 谷 冬彦 (2008). アイデンティティのとらえかた 岡田 努・榎本博明 (編) シリーズ自己心理学第5巻 パーソナリティ心理学へのアプローチ 金子書房 pp.6-21.
- 田島 司 (2010). 自己概念の多面性と精神的健康との関連—女子大学生を対象とした調査— 心理学研究, **81**, 523-538.
- 高橋 悟 (2010). 学生相談の視点から見た「適応」について 鎌倉女子大学紀要, **17**, 31-41.
- Watson, D. A., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Psychology*, **54**, 1063-1070.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-48.
- 山本里花 (1989). 「自己」の二面性に関する研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究, **37**, 302-311.
- 吉田琢哉・高井次郎 (2008). 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連: 自己概念の分化モデル再考 実験社会心理学研究, **47**, 118-133.